HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第2章　アイヌ民族の階層形成
Author(s)	野崎, 剛毅
Citation	「調査と社会理論」研究報告書, 30-37
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52413
Type	other
File Information	AN00075302_30_2.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第２章　アイヌ民族の階層形成

野崎　剛毅｜國學院大學北海道短期大学部准教授

第１節　分析の視点

本章では、新ひだか町のアイヌ調査をもとに、アイヌ民族の人々の階層が何によって規定されているのかを検討する。

アイヌ民族の階層形成過程については、札幌市とむかわ町のアイヌ民族を対象に同様の調査票を用いた分析をおこなっている（野崎　2012）。そこでは、対象者を年齢（「青年層」「壮年層」「老年層」の３段階）×性別で６つのカテゴリーにわけ、それぞれの階層形成過程を検討している。その結果、①男女問わず青年層がきわめてきびしい生活環境に置かれていること、②男性壮年層、男性老年層では学歴社会がある程度機能し、学歴が到達階層に影響を与えていること、③女性にとっては階層形成に結婚が与える影響がきわめて大きく、結婚相手の前に出身階層や学歴などの影響力がほとんど意味のないものになってしまっていること、などの知見が得られている。本章においては、これらの知見を参考に階層形成の要因を探っていくこととする。

本章で使用するデータは以下のとおりである。2012年９月に新ひだか町でおこなったアイヌ民族への聞き取り調査データのうち、アイヌの血を引いている者で本章での分析に必要な情報が確実に把握できる48ケースを分析対象とする。北海道などが使用している定義では、アイヌの血を引く者と養子、婚姻などにより家族になった者もアイヌ民族としている。それでもアイヌの血を引いていない者を分析から除外するのは、本章でおこなう検討が各人の生い立ちや婚姻・養子縁組等以前におこなわれる教育などを中心としているためである。また、野崎（2012）においては各人の出身階層や学歴、職業経験などを表として提示しているが、今回の新ひだか調査は母集団となるアイヌの人々が前回の札幌、むかわ調査よりも少ないため、個人の特定を避けるためにも提示する表などは最少限にとどめている。

分析の対象者は表２－１のとおりである。30代以下の青年層は９人で、もっとも若い対象者は21歳である。青年層の平均年齢は30.7歳であるが、男性が27.0歳であるのに対し女性は33.6歳と男女で大きな差がみられる。20代の３人は全員男性であり、女性の最年少は31歳である。壮年層の平均年齢は48.1歳で、男性は50.0歳、女性は46.5歳である。老年層は平均年齢67.6歳、男性が68.0歳、女性が67.3歳である。最高齢は女性の78歳である。全体では男性が45.8%、女性が54.2%と女性の方が若干多くなっており、各世代でもわずかずつではあるが女性が１～２人多い。

表２－１　対象者の内訳　　単位：人、%

	男性	女性	計
青年層（～30代）	4（44.4）	5（55.6）	9（100.0）
壮年層（40代、50代）	11（47.8）	12（52.2）	23（100.0）
老年層（60代～）	7（43.8）	9（56.3）	16（100.0）
計	22（45.8）	26（54.2）	48（100.0）

分析に使用する主な変数は以下のとおりである。まず、出身階層としては「15歳時の生活」を使用する。これは、中学校を卒業するころの家族の暮らしぶりを聞いたものである。それぞれの回答をおおまかに「豊か」「普通」「苦しかった」の３段階に分類している。また、わかる範囲ではあるが親の職業も随時参考にする。表２－２をみると、青年層では男女とも「普通」と「苦しかった」が同数で「豊か」と答えた者はいなかった。壮年層では、男性の場合やはり「普通」と「苦しかった」が同数であるのに対し、女性は「豊か」が２人いた。「普通」が６人、「苦しかった」が３人である。老年層になると、「豊か」から「苦しかった」までが出揃い、男女とも「豊か」が１人ずつで「普通」と「苦しかった」がほぼ同数となっている。

表２－２　15歳時の生活　　単位：人

		豊か	普通	苦しかった	不明等	合計
青年	男性	0	2	2	0	4
	女性	0	2	2	1	5
壮年	男性	0	5	5	1	11
	女性	2	6	3	1	12
老年	男性	1	2	2	2	7
	女性	1	3	4	1	9
計	男性	1	9	9	3	22
	女性	3	11	9	3	26

到達階層は、現在の職業と個人年収、世帯年収で判断をする。現在の職業では、男性は農林漁業がもっとも多く、ついで建設・採掘が４人と続いている。その他は「専門・技術」と「事務」が２人ずつ、「サービス」「保安」「生産工程」「輸送・機械運転」「運搬・清掃」がそれぞれ１人ずつである。無職も３人いるが、全員が老年層で定年後の人々である。女性に関しては、無職が19人と圧倒的に多い。特に老年層は９人全員が、青年層は５人中４人が無職である。女性の無職はほとんどが専業主婦あるいは定年であるが、なかには親の介護という者もいた。それ以外では、「運搬･清掃」が３人、「サービス」が２人、「事務」と「販売」(生命保険の営業）が１人ずつであった。

年収は男女差が非常に大きい。表２－４で個人年収をみると、全体では男性が297.6万円であるのに対し女性は77.1万円と４分の１の水準になっている。もっとも個人収入が多かったのは老年層男性であり、「700 ～ 800万円」であった。これは、家賃収入によるものである。世帯年収に関しても、個人年収ほどではないものの大きな男女差が存在する。男性は世代差が非常に小さく、青年層、壮年層が400.0万円、老年層が392.9万円である。女性は青年層の290.0万円から徐々に下がっていき、壮年層では220.0万円、老年層では150.0万円、平均で210.9万円であった。男女を合わせた平均をみると、個人年収が180.0万円、世帯年収が300.0万円である。いずれにしても全般に低い水準であることにはかわりなく、北海道の平均年収581万円[1)]と比較して半分程度となっている。

表２－３　現在の職業　　単位：人

		専門技術	事務	販売	サービス	保安	農林漁業	生産工程	輸送・機械運転	建設・採掘	運搬・清掃	無職	合計
青年	男性	1	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	4
	女性	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4	5
壮年	男性	0	1	0	0	1	4	0	1	3	1	0	11
	女性	0	0	1	2	0	0	0	0	0	3	6	12
老年	男性	1	0	0	1	0	1	1	0	0	0	3	7
	女性	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	9
計	男性	2	2	0	1	1	6	1	1	4	1	3	22
	女性	0	1	1	2	0	0	0	0	0	3	19	26

表２－４　個人年収　　単位：人

		なし	～100万円	100～200万円	200～300万円	300～400万円	400～500万円	500～600万円	600万円～	不明	合計	平均（万円）
青年	男性	0	0	2	1	1	0	0	0	0	4	225.0
	女性	2	0	3	0	0	0	0	0	0	5	90.0
壮年	男性	0	0	3	1	2	2	2	0	1	11	340.0
	女性	2	4	4	1	0	0	0	0	1	12	95.5
老年	男性	0	1	2	2	1	0	0	1	0	7	278.6
	女性	3	4	1	0	0	0	0	0	1	9	43.8
計	男性	0	1	7	4	4	2	2	1	1	22	297.6
	女性	7	8	8	1	0	0	0	0	2	26	77.1

表２－５　世帯年収　　単位：人

		なし	～100万円	100～200万円	200～300万円	300～400万円	400～500万円	500～600万円	600万円～	不明	合計	平均（万円）
青年	男性	0	0	0	0	2	2	0	0	0	4	400.0
	女性	0	0	2	1	0	2	0	0	0	5	290.0
壮年	男性	0	0	2	2	1	2	2	1	1	11	400.0
	女性	0	1	3	4	2	0	0	0	2	12	220.0
老年	男性	0	1	1	2	1	0	0	2	0	7	392.9
	女性	0	4	2	1	0	1	0	0	1	9	150.0
計	男性	0	1	3	4	4	4	2	3	1	22	397.6
	女性	0	5	7	6	2	3	0	0	3	26	210.9

出身階層と到達階層とを媒介するものとしては、本人の学歴と結婚の有無を使用する。

本調査対象者の最終学歴をみると、青年層では男女合わせても大学進学者が１人もいなかった。高等専門学校が１人と専門学校が１人いるだけである。また、女性をみると、５人中３人が高校へ進学していない。わが国では1970年代にはすでに高校進学率が90％を超え、高校全入時代となっていることを考えると、この数字の特異さが際立つ。なお、高校進学者２人のうち１人は中退しているため、高校を卒業した者は１人だけである。壮年層では、大学へ進学した者が２人いる。ただし、そのうち１人は中途退学している。青年層と異なり、壮年層では男性のほうが学歴が低くなっており、高校へ進学しなかった者が３人いる。女性では10人が高校へ行き、全員が卒業している。老年層になるとさらに事情はかわり、男性で７人中４人が高校へ進学していない。さらに、中学校も最後まで通っていない者が２人、小学校の途中から学校へ行かなくなった者が１人いる。女性はさらに極端であり、９人中、高校へ進学した者は１人もいなかった。なお、「そ

の他」の４人のうち、２人は中学卒業後、１人は高校卒業後に職業訓練学校へと進学した者である。もう１人は中学卒業後に専修学校高等課程へ進学した者である。

表２－７は、結婚の状況をまとめたものである。青年層も結婚している者が多く、未婚である者は男女１人ずつであった。なお、うち１人は未婚ではあるが、子どもが２人いる。また、離婚経験者が１人いる。壮年層は未婚が男性３人、女性２人である。離別、死別の者も青年層に比べて増えている。表でいう「離別」は離婚を経験して現在未婚状態にある人である。離婚を経験して現在再婚、再々婚である者も含めると、壮年層の女性５人、男性１人が離婚を経験していることになる。老年層となると、一度も結婚したことがない者は１人もいない。かわりに死別が増え、男性１人、女性３人となっている。なお、もっとも多いもので現在４回目の結婚をしている者もいる。

以上をふまえて、以下に各世代の階層形成過程を検討していく。

表２－６　最終学歴　　単位：人

		小学校	中学校	高校	専門学校	高専	大学	その他	合計
青年	男性	0	0	2	1	1	0	0	4
	女性	0	3	2	0	0	0	0	5
壮年	男性	0	3	4	1	0	2	1	11
	女性	0	1	9	0	0	0	2	12
老年	男性	1	3	2	0	0	0	1	7
	女性	2	7	0	0	0	0	0	9
計	男性	1	6	8	2	1	2	2	22
	女性	2	11	11	0	0	0	2	26

注１）数字には中途退学者を含む。

表２－７　既婚、離別、死別等　　単位：人

		未婚	既婚	離別	死別	合計
青年	男性	1	3	0	0	4
	女性	1	3	1	0	5
壮年	男性	3	7	0	1	11
	女性	2	6	3	1	12
老年	男性	0	6	0	1	7
	女性	0	4	2	3	9
計	男性	4	16	0	2	22
	女性	3	13	6	4	26

第２節　青年層の階層形成過程

青年層の特徴は出身階層と現在の到達階層の間にほとんど関連がみられないことである。表２－８は、15歳時の生活と最終学歴別に平均個人年収と平均世帯年収を出したものである。ここで特徴的なのは、たとえば女性の15歳時の生活別平均年収において、個人年収は15歳時「普通」のほうが150.0万円と「苦しい」の75.0万円より高く、逆に世帯年収では「苦しい」のほうが350.0万円と「普通」の150.0万円より高くなっているように、一方のカテゴリーの個人年収が高いと、世帯年収はもう一方のカテゴリーのほうが高くなるというねじれの関係にあることである。また、職業などをみても年収との関連性はほとんどみられない。結果として、最終学歴も個人年収も平準化しているため、ほとんど差異が見出だせないのが青年層の現状といえるだろう。

ただし、女性については、離婚している１人と未婚の１人はともに個人年収が100 ～ 200万円であり、子どもはいるものの他に収入のある者がいないため、世帯年収も同じカテゴリーとなっ

ている。なお、男性の未婚者は両親と同居しているため、個人年収は100 ～ 200万円と高くはないが、世帯年収は300 ～ 400万円と高くなっている。

階層形成過程という観点でみれば、青年層は男女とも、まだ階層分化が生じる状態ではなく、また、到達階層にそもそも差が生じていないため、かえって出身階層による有利不利もないという状態になっているといえる。

表２－８　15歳時生活別、最終学歴別平均年収　　単位：人

		N	平均個人年収	平均世帯年収
男性	15歳時「普通」	2	250.0万円	400.0万円
	15歳時「苦しい」	2	200.0万円	400.0万円
	高校	3	250.0万円	383.3万円
	高専	1	150.0万円	450.0万円
女性	15歳時「普通」	2	150.0万円	150.0万円
	15歳時「苦しい」	2	75.0万円	350.0万円
	中学	2	100.0万円	250.0万円
	高校	3	75.0万円	350.0万円

第３節　壮年層の階層形成過程

壮年層では、男性に関しては個人年収が「500 ～ 600万円」（２人）から「100 ～ 200万円」（３人）まで、到達階層の違いがはっきりと表れてきている。そして、そこには15歳時の生活や学歴がはっきりとした影響を与えている。15歳時の生活が「普通」だった者の平均個人年収は410.0万円で、「苦しい」とこたえた者は300.0万円であった。また、大学・専門学校と高校進学者の平均個人年収がともに450.0万円であったのに対して、中学卒業で就職した者の平均は175.0万円であった。

ここから２つの知見が導き出される。すなわち、「壮年期になると、出身階層が到達階層に及ぼす影響力が強くなる」ことと、「その出身階層の違いは学校教育によって覆せる可能性がある」ことである。そして、この２点を考慮した際に重要な意味合いを持ってくるのが進学に関するウタリ対策援助の存在である。

表２－10では、壮年期男性の出身階層別最終学歴と平均年収、そしてウタリ対策の奨学金を使用したかどうかの関係を示している。たとえば15歳時の生活が「普通」であった５人のうち、２人が大学・専門学校へと進学し、そのうちの１人はウタリ対策の奨学金を使用していた、ということである。表２－10からは、15歳時「普通」から高校、大学、専門学校へ進学した４人のうち２人が、そして15歳時「苦しい」から大学、高校へ進学した３人のうち２人がウタリ対策奨学金を使用していたことがわかる。そして、表２－９でみたように、15歳時「普通」と15歳時「苦しい」の間には平均年収の大きな差があるが、「普通」→「大学」と「苦しい」→「大学」の間にはほとんど差が生じていないことがわかる。出身階層と到達階層の再生産構造を、ウタリ対策奨学金が埋める可能性が示唆されているのである。

女性の場合は、出身階層や学歴によって個人年収の違いは生じているが、それらは結婚したかどうかによって相殺されており、世帯年収はほとんど差が表れていない。実際に、現在夫がいる者（既婚）といない者（未婚・離別・死別）とを比較すると、個人年収は夫ありの50.0万円に対して夫なしが133.3万円となっているが、世帯年収では夫なし150.0万円に対し夫ありが290.0万円となっている。出身階層や学歴などのもつ影響力が結婚の有無によってすべてみえなくなってい

るのが壮年層女性の特色であるといえるだろう。

表２－９　15歳時生活別、最終学歴別平均年収　　単位：人

		N	平均個人年収	平均世帯年収
男性	15歳時「普通」	5	410.0万円	430.0万円
	15歳時「苦しい」	4	300.0万円	425.0万円
	大学・専門学校	3	450.0万円	616.7万円
	高校	4	450.0万円	450.0万円
	中学	4	175.0万円	200.0万円
女性	15歳時「豊か」	2	50.0万円	不明
	15歳時「普通」	6	125.0万円	200.0万円
	15歳時「苦しい」	3	83.3万円	216.7万円
	高校	10	100.0万円	225.0万円
	中学	2	75.0万円	200.0万円
	夫あり（既婚）	6	50.0万円	290.0万円
	夫なし（未婚・離婚・死別）	6	133.3万円	150.0万円

表２－10　出身階層別最終学歴と平均年収、奨学金の有無（壮年期男性）

15歳時生活	最終学歴	奨学金	平均個人年収	平均世帯年収
普通（５人）	大学・専門学校（２人）	○１人	450.0万円	500.0万円
	高校（２人）	○１人	500.0万円	500.0万円
	中学（１人）	―	150.0万円	150.0万円
苦しい（５人）	大学（１人）	○１人	450.0万円	850.0万円
	高校（２人）	○１人	350.0万円	350.0万円
	中学（２人）	―	200.0万円	250.0万円

第４節　老年層の階層形成過程

老年層は、ほぼ全員がすでに定年を迎え、職業生活からリタイアしている。また、定年までの職歴をみても、その多くが職を転々とかえていたり、あるいは個人経営の仕事などをしていたためか国民年金の受給者が多く、結果として定年後の収入はほとんど差がない状態になっている。

女性は９人全員が無職であり、個人収入（年金や生活保護を含む）は３人が無収入、４人が100万円未満、１人が100 ～ 200万円、１人が不明（生活保護受給）であった。そこには出身階層による差も、学歴による差も、あるいは配偶者の存在による差もほとんど意味のないものとなっている。あえて差を見出だすならば、現時点で夫がいる者の世帯年収が平均200.0万円であるのに対し、夫がいない（離別もしくは死別）者は100.0万円と半分になっていることくらいである。

男性の場合、女性よりはバラエティにとんだ現状となっており、個人年収も100万円未満が１人、100 ～ 200万円が２人、200 ～ 300万円が２人、300 ～ 400万円が１人、それ以上が１人となっている。７人のうち、現在も働いているのは４人である。４人の平均年収は250.0万円である。一方、すでに働いていない者は３人であるが、そのうちの１人は先にもふれたように、多額の家賃収入を得ているため、年収も突出して高い。他の2人は最低限の年金だけで生活しており、平均年収は100.0万円であった。なお、女性でみられた配偶者の有無であるが、男性の場合は7人中6人が既婚者であり、配偶者がいない者が死別の１人しかいないため、この点の検証はできない。

男女とも、到達階層に対する学歴の影響もほとんど見られない。しかし、これはそもそも学歴の影響を検討できるほど、学歴の違いがないというのが事実である。また、現時点の年収の低さが、果たしてリタイアしたためだけであるのかといえば、必ずしもそうとはいえない状況がみられる。何人かからは引退直前の職業の状況が聞けているものの、たとえばみずから独立して会社を経営していた者であっても、ほとんど実入りを残せないままに引退を機に会社を閉じていたり、また、

そもそも多くの対象者は転職が非常に多いため、引退間際でもあまり収入が増えていなかったりする。今回の調査では２名ほど、いわゆる「成功者」に分類できるような経歴を残した高齢者がいたものの、その２名を例外とするならば、出身や学歴にかかわらず大きな財産を残すことができなかった事実が、静内のアイヌ高齢者の大きな特徴であったといえるだろう。

第５節　まとめ

以上、新ひだか町のアイヌ民族の階層形成過程をみてきた。最後に得られた知見をまとめておこう。

札幌とむかわの調査から得られた知見とあわせると、①青年層の厳しい生活環境については、本調査では少し異なる傾向が見られた。男性については、青年層が３つの年齢階層のなかでもっとも低くなっている。ただし、その平均値は225.0万円であり、札幌・むかわ調査の200.0万円よりも高い。また、壮年層が340.0万円と、札幌･むかわ調査の426.7万円よりも90万円近く低いため、結果としては青年層の相対的な厳しさは緩やかなものになっている。一方、女性に関してはすべての年齢層で本調査は札幌・むかわ調査を大きく下回っている。特に老年層は43.8万円と、札幌・むかわ調査の半分以下の水準で、青年層よりもはるかに低い。これは、札幌・むかわよりもはるかに厳しい新ひだか町の経済状況と、新ひだか町におけるとくに女性の無職率（専業主婦率）の高さがうかがえる結果となっている。

表２－11　個人年収の比較

	男性			女性		
	青年層	壮年層	老年層	青年層	壮年層	老年層
本調査	225.0万円	340.0万円	278.6万円	90.0万円	95.5万円	43.8万円
札幌・むかわ	200.0万円	426.7万円	258.3万円	122.7万円	130.4万円	91.2万円

注)「札幌・むかわ」の数字は野崎（2012）による。

②男性壮年層と老年層において学歴を介在した階層形成が成立しているという点については、本調査でも壮年層にはそのような傾向がみられた。すなわち、学歴の高い者が低い者よりも高い収入を得ていた。ただし、老年層においては、このような傾向はみられなかった。これが世代的な問題であるのか、コーホートの問題であるのかについては、さらなる吟味が求められるだろう。

③女性において、出身階層や学歴などよりもだれと結婚するのかが階層形成に重要であるという知見については、本調査においてもまったく同様の傾向がみられた。とくに壮年層においては、事実上の生活水準を決める世帯年収において、夫がいる者といない者の間に大きな断絶があった。夫のいない女性の年収の低さも含めて、新ひだかのアイヌ社会が、女性が自立して生きていくことが難しい社会となっていることがわかるのである。

これらの他に、階層形成という点では新ひだか町の地域的な特色とかかわり１つの知見が得られる。すなわち、階層分化を考える場合に、そもそもいわゆる「高い到達階層」というものが存在しないという点である。男性に関していえば、壮年層では、ある程度の到達階層の分散がみられた。だが、青年層では、個人年収の差がほとんどついてない。これ自体は、札幌・むかわ調査でも見られた世代的な特徴であると考えられる。ただ、新ひだか町の場合は老年層においても、

階層の分化がほとんどみられないのである。女性においてはいうまでもなく、彼女たちの到達階層は単純に配偶者の有無で決定される。新ひだか町の階層形成の特色は、あまり好ましくない意味において、到達階層と出身階層の間を媒介する要因が明確にはみられないという点にある。本調査においては、そもそも「高い到達階層」というものが想定しにくいのである。これはもちろん、新ひだかの人々が不幸な人生を送っているということを意味するのではない。たとえば老年層のある女性対象者は、そのままドラマにできそうな波瀾万丈の人生を語ったうえで最後に、「今は幸せです。孫に囲まれて」と話を結んだ。この女性は晩年になってからこの言葉を出せるという点では幸福な人生を歩んだということもできるだろう。何をもって幸福とするか、成功とするかは人によって様々である。しかし、少なくとも本調査の対象者には、安定した職業について高い給与を受けるという階層移動的にみた成功を成し遂げた者はほとんどおらず、多くの人びとが不安定な雇用と多くの転職、低く抑えられた賃金のなかで生活をしているのである。これは、比較的安定したといえる大企業がなく、また札幌はもちろん、むかわにとっての苫小牧のような、近くて通えるような都市もないという新ひだか町の事情を反映しているといえるだろう。このような環境の影響を直接的に受けて、生まれや教育が有利にも不利にも働かず、努力による上昇移動が難しい現状にさらされているのが新ひだかのアイヌの人々の最大の特徴といえるのかもしれない。

注

1）「平成23年家計調査」（総務省統計局）にもとづき、北海道の平成23年月別実収入を１月から12月まで足したもの。ただし、この数字は勤労者世帯のものである。

参考文献

野崎剛毅，2012,「階層形成過程と階層分化の要因――階層形成過程としての生活史」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その２　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究センター，95-108.

（野崎　剛毅）